



GLOBAL CONFERENCE ON SUSTAINABILITY AND REPORTING

Information. Integration. Innovation.

Amsterdam | 22-24 May 2013

GRI 国際会議 2013

参加報告

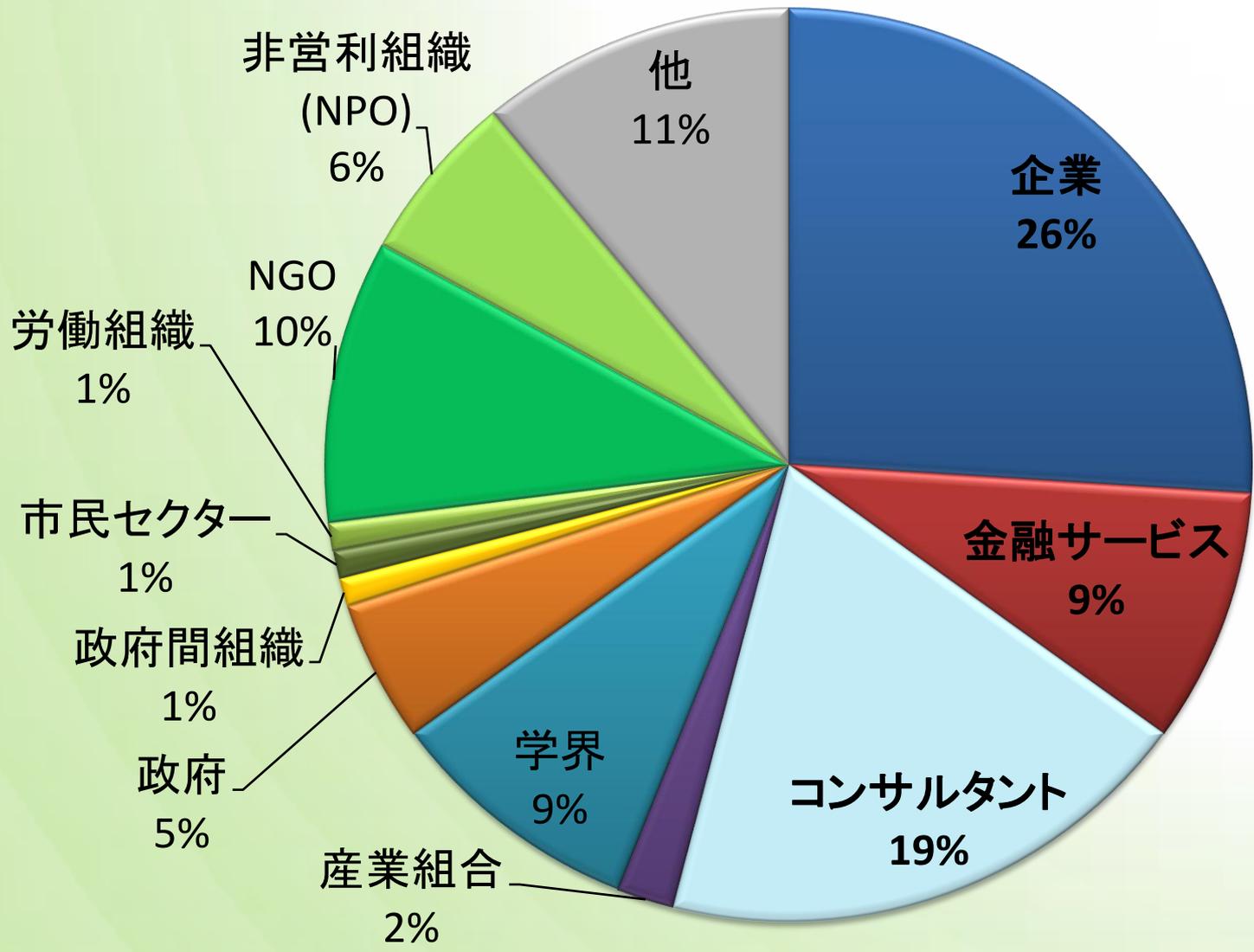
日本財団 中村 和



1. 参加者の概要
2. セッション構成
3. 世界のCSR最新注目トピック
4. 今後の展望

1. 会議の参加者：セクター別

セクター別参加者内訳(1,661名)



1. 会議の参加者: 例

参加組織(例)

Aker Solutions AS
 AngloGold Ashanti Ltd
 Arabia CSR Networkk
 Bloomberg
 Bosch
 Brazilian development bank
 BSR
 Carbon Disclosure Project
 CH2M HILL
 China development bank
 Coca-Cola İçecek,
 Concept Green
 DELL
 Deloitte
 Earnst & Young
 Ecopetrol S.A
 EDF
 Eiris
 ES Global Consulting
 European Commission
 F. Hoffmann-La Roche Ltd
 French Ministry of Foreign Affairs
 Fuji Xerox
 General Electric
 General Motors

Government of India
 Government offices of Sweden
 Greenpeace International
 Harvard Business School
 Heineken
 IIRC
 Impact Sustainability
 ISO
 KPMG
 NASDAQ OMX
 Natura
 Nestle
 New York Stock Exchange
 Nike Inc
 Norwegian Ministry of Foreign Affairs
 OECD
 Petrobras
 PwC
 Rabobank
 Reliance Industries Ltd.
 Royal Dutch Shell plc.
 S&P Dow Jones Indices
 Samsung Life Insurance
 Sasol
 Save the Children

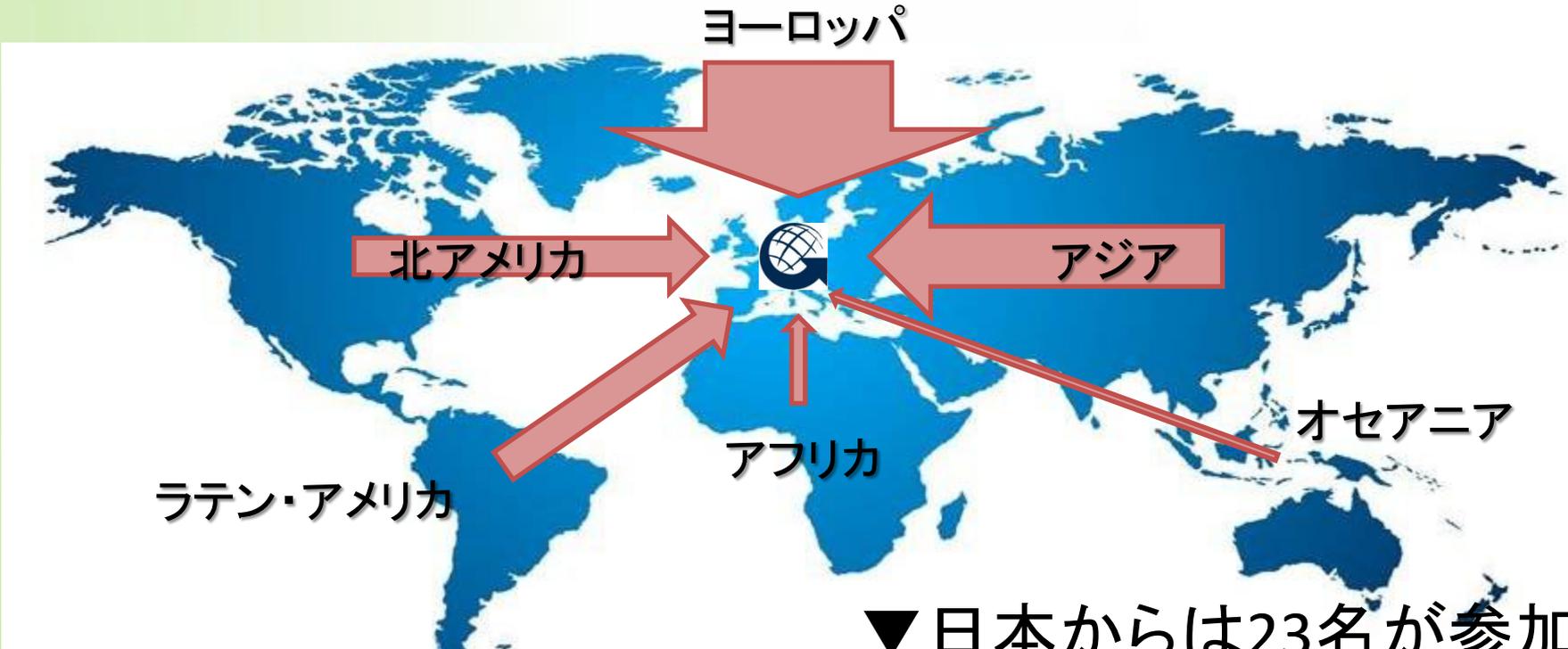
Singapore Exchange
 TATA steel ltd.
 The guardian
 Umicore
 UN Global Compact
 UNEP
 University of Sydney
 UTUC CSI JGB
 Volans
 Volkswagen Group
 WBCSD
 World Bank
 WRI

登壇者数 トップ10

1. オランダ (GRI所在地)
2. アメリカ合衆国*
3. イギリス
4. 南アフリカ
5. フランス
6. インド*
7. ブラジル*
8. ベルギー
9. 中国*
10. スイス

*GRI支部のある地域

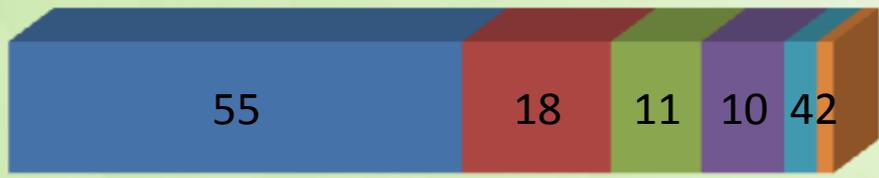
1. 会議の参加者：地域別



▼日本からは23名が参加



■ OECD ■ 非OECD



■ ヨーロッパ ■ アジア ■ 北アメリカ
 ■ ラテン・アメリカ ■ アフリカ ■ オセアニア



2. 会議の構成: セッション

G4関連

- ・マテリアリティ *materiality*
 - ・情報開示 *disclosure*
 - ・ガバナンス *governance*
 - ・サプライチェーン *supply chain*
 - ・地球温暖化 *greenhouse gas*
- ...など

レポートニングのトレンド

- ・保証 *assurance*
- ・データ・アクセス *data accessibility*
- ・フレームワークの協調
(ISO, GC, CDP, OECD)
harmonization of frameworks
- ・統合レポートニング
Integrated reporting

政策分野

- ・貧困問題 *poverty alleviation*
- ・Rio+20 *sustainable development*
- ・ESGと投資判断
investors' decision making
- ・Post-2015
millennium development goals
- ・レポートニングの規定
reporting regulation

各国代表団

- ・アメリカ合衆国
- ・オセアニア
- ・ブラジル
- ・韓国
- ・インド
- ・フランス
- ・アラブ地域
- ・ラテン・アメリカ
- ・中国
- ・トルコ
- ・南アフリカ
- ・日本

3. 世界のCSR最新注目トピック

企業の経営問題

その企業が存在することは、社会にとってプラスの価値をもたらす（‘Net Positive’の概念）ことを信頼性のある情報をもつて的確に示す。

長期的な社会への価値創出とは？

企業が経営戦略としてNGOと組んでロビー活動をし、差別化を図る。

（解説）

それでは世界のCSRは今後どのような展開を見せると予想されるのでしょうか。ここからは会議だけでなく、ヨーロッパで対話をしたさまざまな関係者のコメントから最新の話題をいくつかご紹介します。

まずは、CSRが企業の経営問題としてどう本流に組み込まれていくかです。

Net Positiveという企業の存在そのものが社会にとって全体的にプラスの価値をもたらすのかという概念が注目されつつあります。

これは、「もしその企業が存在しなかったとすると、社会にどんな影響はあるのか」という問いかけから始まります。

企業の事業活動が、商品やサービスの提供から地域雇用、環境負荷や資源利用の軽減などありとあらゆる社会への影響力を考慮したとき、その企業が総合影響力でプラスとなるのか、そしてそれを示す情報はあるのかということです。

少し概念的な話になってしまいましたが、根本にあるのは、「持続可能な世界」を目指そうと言って、なかなか良い変化の兆しが見られない中、本当に企業がどうやって持続可能性なビジネスができるか、その模索の中にあるということです。

使われる言葉自体は人やところにより、違いはあります。ただ指数やインディケーターばかり出せばいいものではない、という気付きから次のステップはどうなるという議論が「持続可能性」というキーワードで起こってきているというのが色々な人のコメントに共通していました。これがレポートの側面から見ると、例えば、統合報告フレームワークも、社会への価値創出であるとか、長期的な経営戦略がキーワードとなってきています。

更には、ユニリーバやネスレなど先進的な取り組みをしている企業では、この社会への価値創出や持続可能性が経営戦略として組み込まれてきています。

特にこういった企業では今まで外圧をかけてくる存在として敵対的な関係だったNGOと、逆に手を組んで、持続可能性をブランディングに取り込み、差別化を図るという展開が見られます。こういった先進企業の取り組みの今後がより注目されていくのではないかと予想されます。

4. 今後の展望

レポートिंगのこれから

ガイドラインやフレームワークはそれぞれを補うものである(complementary)が、今は乱立している。

レポートिंगは誰に向けて発行するのか？

(解説)

世界の潮流を踏まえて、CSRレポートはこれからどうなっていくのでしょうか。

色々なインタビューをしていて、お互いガイドラインはフレームワークがそれぞれを補う関係であるというのは共通認識としてあることが見えてきました。ただ、やはり補うのではなくお互い競争関係になったりして、乱立している。今後どのように集約していくかは注視していく点でしょう。

その中で情報発信のツールであるCSRレポートは誰に向けてなのか、マルチステークホルダーなのか、投資家なのか、そこを考えたうえでのレポートिंगのツールを選んで使う、そこが重要なカギになってくると予想されます。

GRI

<https://www.globalreporting.org/information/events/conference2013/Pages/default.aspx>

2013 Global Conference in Review

<https://www.globalreporting.org/resourcelibrary/2013-GRI-Global-Conference-in-Review.pdf>

Guardian Sustainable Business

<http://www.guardian.co.uk/sustainable-business>

Unilever: Sustainable living

<http://www.unilever.com/sustainable-living/>

Nike: LAUNCH

<http://www.launch.org/>

Nestle: the Nestle Supplier Code

<http://www.nestle.com/aboutus/suppliers>